言語学・応用言語学専攻 4 年
1LT11142G
松村芽依

量を表す連体修飾節と連体詞ソノ

1. はじめに

(1) a. 太郎が寿司を食べた量
b. *[太郎が寿司を 30 個食べた]量 （江口 2002: 2152）

(2) a. 太郎が寿司を 30 個食べたその量
b. 先生が宿題を 500 問出したその量（*先生が宿題を 500 問出した量）
c. 次郎がティッシュを 2 箱分配ったその数（*次郎がティッシュを 2 箱分配った数）

本論文は、(1a,b), (2)の対立が何を示しているかについて考察したものである。

2. 「内の関係」と「外の関係」

連体修飾節には「内の関係」と「外の関係」があることが知られている（寺村 1993 等）。

(3) 「内の関係」
私が昨日学校で見た彼女の姿
＝私が昨日学校で彼女の姿を見た

(4) 「外の関係」
彼女が昨日猫と遊んでいた姿
≠*彼女が昨日姿（を／で／に...）猫と遊んでいた

2.1. 量を表す連体修飾節と「内の関係」「外の関係」

(5) →「外の関係」？
a. *太郎が寿司を量｛で／に...｝食べた
b. *先生が宿題を量｛で／に...｝出した
c. *次郎がティッシュを数｛で／に...｝配った

(6) →「内の関係」？
a. *私が昨日学校で彼女を見た姿
b. *母が子供に『ももたろう』を読んだ絵本

このように、量を表す連体修飾節は、「外の関係」としての特徴と「内の関係」としての特徴の両方を備えており、簡単に分類できない。

3. 「主題ー解説」の文

寺村 (1993: 199-200) は、(4)のような「外の関係」の場合、被修飾名詞を「主題」としてとり立て、修飾部でその内容を解説する構文に言い換えることができると述べている。

(7)　　その姿は、彼女が昨日学校で猫と遊んでいた（という）ものだ。

しかし、厳密に(4)を言い換えると、実は(8)のように容認できないものになってしまう。

(8)　　*[姿]は、[彼女が昨日学校で猫と遊んでいた]{の／もの}だ。

(7)は、(9)のような連体修飾節の言い換えとみなすべきものであり、(4)と(9)は別の構文だと考えるべきではないだろうか。

(9)　　[彼女が昨日学校で猫と遊んでいた]その姿

そして、(4)と(9)の対立こそ、(1a)と(2a)の違いなのである。

(10) a.　**その**量は、[太郎が寿司を 30 個食べた]{の／（という）もの}だ。
　　b.　**その**量は、[先生が宿題を 500 問出した]{の／（という）もの}だ。
　　c.　**その**数は、[次郎がティッシュを 2 箱分配った]{の／（という）もの}だ。

4. 結論

以上、示したように、「内の関係」「外の関係」というだけでは分類しきれない連体修飾節があり、その中には、「主題ー解説」の文として言い換えられるタイプの連体修飾節がある。(2a)の容認性が高いのは、ソノをつけることによって、「内の関係」「外の関係」どちらにも分類できなかった量を表す連体修飾節が、量を表す連体修飾節がもともと持っていた「内の関係」の特徴(1b), (6)がなくなり、その結果、「主題ー解説」の文として言い換えられるタイプの連体修飾節となったからなのである。

参照文献

江口正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」　福岡大学人文論叢, 33-4, pp. 2147-2167.
寺村秀夫 (1993) 「連体修飾のシンタクスと意味　その 1」『寺村秀夫論文集Ⅰ』, pp.157-207
　東京：くろしお出版